

# 評価委員会報告

本学の自己点検・評価活動は、2004年度からの学校教育法の改正に伴う認証評価の義務化と、2005年度からの本学の総長制廃止に伴い、これまでの総長を中心とした自己点検・評価体制から、学長（教学）を中心とした自己点検・評価体制を構築するため、2006年2月に新たに「明治大学自己点検・評価規程」を制定し、4月から施行・実施している。この新しい規程では、学長を中心とする全学委員会によって作成された自己点検・評価報告書を、理事長を委員長とする評価委員会に提出し、評価委員会はそれについて第三者的視点から評価し、その結果を全学委員会に報告することになっている。

この新しい規程に基づき、全学委員会は、2007年1月末に「明治大学自己点検・評価報告書」を作成して評価委員会に提出した。これを受けた評価委員会では、3月8日に委員会を開催し、提出された報告書について議論を行い、以下のような意見が出された。

- I この自己点検・評価報告書は、大学基準協会の評価項目や視点に沿って大変詳細に記述されており、1000ページを超え多くの方々が関わられた努力の結果であるということはよく分る。しかし、量が多すぎるだけではなく、その構成も複雑であり、同じような内容の記述が繰り返し見られるなど読みにくいものとなっている。関係者だけが理解するものではなく、学生や父母が見ても分かりやすいようにするためには、もっと数値や図表を盛り込むなど内容を工夫し、簡素化すべきである。認証評価機関には詳細な資料を添付して提出するようであるが、報告書においても、例えば「財政」の項目では、定量的な数値目標を立てるなどして、いつまでに、どうやって、どのようにして、どこまでやるのかを記述することが必要である。そのためには、認証評価機関に提出するものと違う様式の報告書を作成することについても一考を要する。
- II 「個を強くする」という言葉が繰り返し現われるが、それがいかにして具体的な教育の内容に反映されているのか、その中味、問題点、取組みが読み取りにくい。また、各学部・研究科、各機関の評価は詳細に記述されているが、学部評価を合わせたものとしてではない大学全体の評価が見えにくい。
- III 学部によって記述内容に差が見られる。執行部を中心に組織的に自己点検・評価に取り組む姿勢が重要である。自己点検・評価は担当者だけが苦労している面もあるようだが、今回、点検・評価を実施し、報告書を作成することで問題点やその改善方策について共有意識が持てた点は評価できる。理工学部では学科ごとに全教員が参加して外部評価を受け、この活動を通じて自己点検・評価への共有意識が高まった事例からも、このプロセスは継続すべきである。
- IV 大学の理念・目標をはじめとして、情報をもっと外部に発信することが必要であり、企業に比べて大学の努力は低いともいえる。学生や父母、卒業生、一般社会等多くのステークホルダーに対して、大学がどのような方針を持って、何をしようとしているのかを目に見える形で示すことが不可欠である。特に本

学は、個々にすばらしい教育・研究の成果や取組みがあるにもかかわらず、全体としてプレゼンテーション能力が不足しており、学部単位での広報も含め全学的な広報について充実を図るべきである。

- V 認証評価申請を目的として作成されたこの報告書を、大学改革に活用していくことが重要である。点検・評価の結果を政策に反映させるために、評価委員会においても理解を深め、必要であれば予算化していくといったことについて検討を行う。

以 上